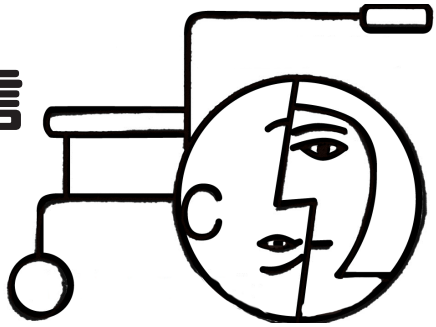
2021年10月28日　NO.126号

障害児・者サークル通信



発行：性教協★障害児・者サークル事務局
〒591-8046 大阪府堺市北区東三国ケ丘町5-2-10 千住方
E-mail　seikyokyo_kansai@yahoo.co.jp
HP　http://shogaiji.seikyokyo.org/

●特集：話し合ってみた！「生命（いのち）の安全教育」をどう考える？ ・・・・・・・・・・・・・・・・1
●沖縄性教協セミナー報告「保健室から発信する性教育」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
●性教協40周年記念企画全国まるっとセミナー　まるっと講座①　報告
第１講座　いま性教育に必要なことは何か－社会的養護・特別養子縁組の実態を交えながら－・・・・6
第２講座　サークルで「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」を学ぶ ・・・・・・・・・・・・・・・7
●「親ばなれ－子ばなれ」その３「自律（オートノミー）」と
「自立（インデペンデンス）」との関係を中心に（Ⅰ） ・・・・・・・・・・・・・・・・8
●さまざまな家族を知ることは、人の多様な生き方を学ぶ契機になる ・・・・・・・・・・・・・・・・・10

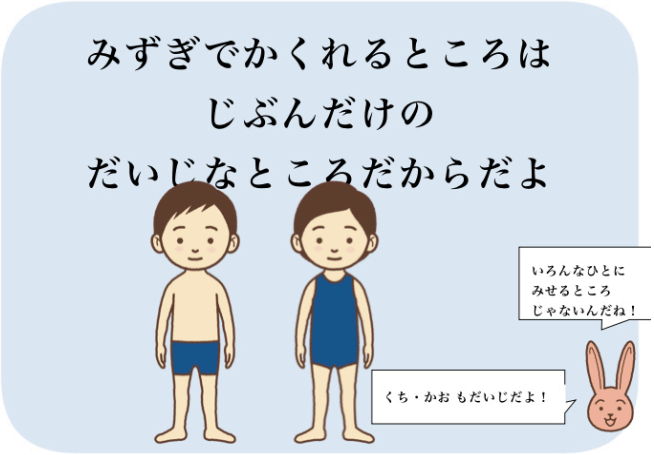
特集：話し合ってみた！「生命（いのち）の安全教育」をどう考える？

今回の特集は最近話題になっている「生命（いのち）の安全教育」（以下、「(いのち)」は略す）を取り上げます。「生命の安全教育」は２０２０年政府が出した「性犯罪・性暴力対策強化の方針」を受け文科省が検討し発表したものです。公募した学校での試験的実践が今年度から開始され、２０２３年には本格実施ということとなっています。幼児期、小学校、中学校、高校、特別支援学校が対象となっており、HP（https://www.mext.go.jp/a_menu/danjo/anzen/index.html）に行くと、それぞれの段階に合わせイラスト教材が紹介されています。特別支援学校向けのイラストはありませんが、幼・小・中の教材を実態に応じ使用するように、となっています。メディアやネットなどでは、性教育を推進している方たちから「不十分ではあるが、性教育がようやく開かれた」といった声も上がっています。

包括的セクシュアリティ教育を学びながら試行錯誤している私たちが、「生命の安全教育」をどうとらえるのかは大事なことであると考え、編集担当(前田、河村、日暮)、障害児教育の現場教員（ゆみさん、さくらさん、すずさん)、福祉現場の支援者（けいこさん，たくやさん，あゆむさん）が集合し意見交流をしました。皆さんとも考え合う機会になっていければと考えています。（教員、支援者の方たちは仮名です。分かりやすくするため教員には先生と付けさせていただきました）

(司会・日暮)：今日はお集まりいただきありがとうございます。最初に「生命の安全教育」イラスト教材を見ての感想をお願いします。

(ゆみ先生)：自分のクラスの子どもたちを思い浮かべ、幼児や小学校の教材を主に見たのですが、知り合いの大学生に見せたところ「すごく強引だね」との感想。「水着で隠れるのは自分だけの大事なところ」



との説明に「いや、からだ全部大事でしょ！」とも。性被害・性加害を防ぐという大人の側の発信が強くて、子どもたちの気持ちや感覚にあってないんだな、と改めて思いました。からだの実感、触れ合う楽しさ、気持ちよさ、安心感を伝える中味がないと、だめかなーと思いました。これだけでは使えないかなと、思いました。

(司会)：そうなんですね。さくらさんはどう思いましたか？

(さくら先生)：被害に合わないためとか書いてありますが、私も道徳的な要素が強いなという印象を受けました。なんか決まった行動を求めているからなのか。被害に合わないために、とかだけでなく、好きな人ができたとき良い関係をつくっていくためにはなど、前向きな内容もあったらいいなと思いました。実際には、パワーポイントの映像だけで理解できる子どもは少ないかな、と思います。私は、体験的に学ぶこととふれあいの文化を保障することをずっと大事にしているつもりなので、違和感がありましたね。

(司会)：違和感を持ったのですね。でも現場を考えた時、こんなかわいい教材、使えるよってとびつくこともありそうですか？

(教員全員)：絶対とびつく人いると思う。

(さくら先生)：今も学校では、毎年同じ資料・パワーポイントを使っています。プライベートゾーンや人との距離感など、決まったテーマのパワーポイントがあるんです。性教育というより性指導という考えなのかなと思います。人との距離感というテーマだったら「腕１本 離れます」というパワーポイントの教材がある、だから疑いなくそれを使ってやる人が多いです。それと同じかな、と思う。

(司会)：さくらさんが考える性教育を模索しにくいような状況があるということですね。

(さくら先生)：わかってくれる先生もいるけど、性教育をやることが好きと言うと「珍しい」と言われてしまいます。今コロナの状況の中「人にさわってはいけない、ハイタッチもいけない」と、学年の先生が言っていました。でも考えてみるとコロナが始まる前からも、人と関わりを規制する、あの子たち最近距離が近いから離した方がいいよねとかありました。その延長で、ほかのクラスに行くことまでやめさせようとか、何か起こる前から動きを規制するみたいな‥変だなって思っています。

(司会)：その中で体験することやふれあうことを大事にしようと発信するのは、きついね。 ゆみさんのところはどうですか？

(ゆみ先生)：さくらさんの悩み、よくわかります。また、すぐに使えそうな教材があれば利用したいという現場の思いもわかります。「生命の安全教育」で気になっているのが、特別支援学校については個別的指導とか教育相談、放課後指導での対応がやたらでてくることです。大人側が決めた「性的な問題行動」が起きた時に、個別に取り出して指導するシチュエーションを想定していると思います。「問題行動」に対し個別に指導するためですよね。

(けいこさん)：それだったら予防教育にはならないよね。

(ゆみ先生)：ならないですよ。禁止ばっかり。人間としての土台の部分をどれだけ豊かにするかなんてない、問題行動を止めるためにやってくださいという感じですよね。

(司会)：「生命の安全教育」イラスト教材については、個別的に問題行動に対して使われることがあるのではという話ですが、すずさんの学校はどうですか？

(すず先生)：うちの学校も結構使われると思います。今年度、性教育の自主学習会をやっているんですが、皆さんは何をどこから教えていいのかわからないと言われます。私のまわりでは「性のユニバーサルデザイン」が有名で、ぱっと使えるのは距離感。「性教育がしてみたい」という気持がある先生も、画一的な性教育に行きがちかなーと思います。性教育に関わらず画一的になってきていて、学校全体として使いやすい指導書や教材があると現場は助かる。今まで性教育のテキストがなかった特別支援学校では、性教育に対しての現場の先生の問題意識も高いし、やりたいという先生は結構いると思います。文科省の「生命の安全教育」はナイスタイミングです。うちの学校も主導する方がいればどんどん取り入れられていくと思います。

(司会)：学校の様子が伝わってきました。福祉現場のたくやさん、どうですか？

(たくやさん)：他の職員と話すと、「人との距離感や自分や相手の気持ちを大切にすることについてわか

りやすく書かれているけれど、性教育としては内容が浅いのかもしれないね」となった。 福祉の現場としては「プライベートゾーンを学ぶ」というと皆さん飛びつくと思うのですが、それだけで解決できるわけでもないですよね。「生命の安全教育」イコール「性教育」なのかな？どちらかというと、これはSSTなのではないかと感じます。これを性教育だと言うと違うのかもしれないけれど、人との距離感のSSTとして捉えればいいのかなと思いました。

(司会)：自分への気づき、人との関係性など土台となる力をどう育むのか、難しいですね。そういえば、すずさん「からだうた」（子どものからだの部位に優しく触れながら「大事だよ」という思いを伝える歌）実践を紹介していましたね。

(すず先生)：肢体の重度のクラスなので教員は子どものからだに触れることが多いです。でもそれと「からだうた」は違うと思って、教員自身も大事な子どものからだという意識が持てるといいなと思って。相手を思いやる気持ち 相手の心もからだも尊重する気持ちが「からだうた」を通して伝わるといいなと。初め、子どもたちの中にはこわばる子もいたけど、繰り返すと緊張が緩むんです。やはり積み重ねだなと思います。

(司会)：丁寧な関わり コミュニケーションがすごく大切、その中でどのような力をどう付けていくかですね。それなしに「触っちゃいけない」ということだけを伝えるのっておかしいということが見えてきました。青年たちを支援しているあゆむさんどうですか？

(あゆむさん)：性の問題で困っているという相談を受けることが多いのですが、現場はピンポイントで早急に指導したいという考えに陥りやすいですね。そうなると「生命の安全教育」がぴったりはまってしまうかもしれないです。「自分を大切にすること」については問題を抱えている子が多くいた中学校でハンドマッサージの実践をしたときに、生徒から「大切にされていると感じた」「私のマッサージで思いが伝わってうれしかった。私にもそんなことができるんだ」という感想がありました。教材のように絵だけでは、わからないような気がします。自分のこころとからだで感じる体験が大切だと思います。

(司会)：子どもの問題行動の奥になにがあるのか、そこにたどり着くのには時間がかかりますよね。今の現場には余裕がないというのもあるのでしょうか？

(ゆみ先生)：性教育の中で 男女の体の違いとか学んでいたらこうはならないのではと思える事例もある。興味関心から「見せて」「いいよ」みたいに起きたことが深刻な問題となってしまう。一方では、禁止や抑圧の中でストレスをため込み子どもたちが安心感を持てないというケースも多くあります。背景も内面も一人一人違うのだから、理解するまでに時間もかかります。安心感に基づいた人との素敵な関係、その体験を保障していないといけないと強く思っています。

(あゆむさん)：ある施設で、自閉症の青年がみんなの前でマスターベーションをするようになり、それを止める女性職員の手をもち「(自分の)おっぱい触って」とお願いするようになった。マスターベーションも止めさせ、女性との距離を取ることに力を入れたら、青年はイライラが増え、強度行動障害と言われる行動が増えてしまった。職員が丁寧に関わる余裕もなく禁止ばかりでは、支援者も本人もどんどんしんどい状況になっていきます。

(たくやさん)：私は、家庭が壊れるほど暴れる２０歳過ぎの青年と関わっています。母子の愛着のところから崩れている。異性問題も起こしますが、それは性欲がコントロールできない問題なのか。深くかかわっていくと、母性を求めている行動にも思えてくる。 そういう事例に多く出会います。問題が起きた時に性の問題なのか、愛着形成の問題なのか見極めていかないといけないと思うのです。福祉の現場もバタバタしているので、すぐダメ！と否定してし

まうことが多い。原因はなんだろうと、力を合わせてみつけていく必要があるのだと思います。

(ゆみ先生)：結局は大人側のセクシュアリティが問われているってことかな？

(すず先生)： 高等部の作業学習では「喜んで働く障害者を育てる」ことを目標にしている。障害者に対する眼差しや、人間そのものをどう見るのか、もう一度立ち止まって考えたい。そういうことって本当はセクシュアリティに含まれるんじゃないかと思うんです。学校現場は多忙といわれるけれど、それだけの問題ではないような‥作業学習は週に一回の会議は必ずあります。「働く」事に関しては頑張って育成するし予算もつく。性に関しては放っておかれている現実。そこを問わないと。

(さくら先生)：私は、大学で性教育を学びました。一方で、実際の現場のむずかしさも聞いていました。その通りだと思うこともあったけど、自分なりの抵抗はしてきたつもりです。毎年性教育をしたいという気持ちは持ち続けているし少しでも広げられたらいいなと思っている。すずさんの話にもあったように性教育の優先度は絶対下の方ですよ。上位にはこない。でも性教育は大事と思っている人も確実にいます。

(すず先生)：授業カードが入っている『生活をゆたかにする性教育』(クリエイツかもがわ)、現場の先生にはこういうのがあると助かるんです。授業を作らなきゃというときに参考になるんですよ。パワーポイントは１つの流れがまとまってあるから使いやすい。「生命の安全教育」も性教協障害児・者サークルで検討して、やり方を変えたり加えたりするのもありなのかな？

(ゆみ先生)：現実的には、全否定だけでは難しいのかもね。使うとしたら、この中に私たちが大事にしていることを入れていく、提案していくってことかな。子どもたちが生き生きと大切な学びが出来ていくことを基本に工夫ができるかだよね。それを利用しながら私たちの考える「性教育」をつくりだしていくみたいな。

(けいこさん)：マッサージは入れてほしいな。問題を繰り返していた青年が注意されるとやっぱりエスカレートしてね。トイレットペーパーを詰まらせる、友達のイヤホンや大切なものを隠すようになったりと。好きなスタッフにハンドマッサージをしてもらっていたらそんな行動が収まっていった。ハンドマッサージーは１対１だし、大事に思っていると相手に伝わるんだね。教材の前後には、マッサージを絶対入れてほしいな。

(たくやさん)：イラスト教材、一つの場面でもいろいろな解釈があるはずです。人間ってそうですよね。いろいろな感情があることを伝えることが大事かなと思います。

(司会)：話は尽きませんが、最後にお二人から感想をお願いします。

(すず先生)：性被害、性の暴力に対しての対処法ではなく背景を考えなくてはいけない、安心感とか不安な気持ちに寄り添うとか共感してもらって嬉しいとか‥ 人としての土台を作っていかないと意味がないということを改めて感じました。

(さくら先生)：サークルで学ぶのは包括的に人格形成をおさえた性教育。「生命の安全教育」は全然違う方向に行っている。でも考え方が違っても学校、福祉の現場で同じ支援する仲間として、目の前の子どもの事実を共有しながら探っていきたいと思いました。

(司会)：皆さん、忌憚なくお話しいただきありがとうございました。今後も学び合い、考え合っていきたい課題であることを確認し終わります。

※使用したイラストは「生命の安全教育」の教材の一部（文科省 HP より抜粋）

今回の特集はいかがでしたか？

☆今年も、**「人間発達と性を語る　第２７回障害児・者性教育セミナー」**を行いますので、共に学び合いましょう！
日程：**２０２２年２月１３日（日）**
開催方法：オンライン（Zoom）
詳細は別途お知らせいたしますので、まずは予定を空けておいていただけますと幸いです。

☆**「第７回　せいかつをゆたかに障害児・者性教育セミナー」**も開催されます。
申し込み方法や参加費等は、案内チラシをご覧ください。皆さまのご参加を心からお待ちしています。

沖縄性教協セミナー報告
「保健室から発信する性教育」

８月２８日、沖縄性教協セミナーで金子由美子さんの講座がありました（申込７５人）。その報告をします。

性教育の相談場所は性教協

金子さんが採用された頃の中学校は全国的に荒れて暴力がはびこり竹刀を持つ先生もいた。生徒を殴るのも許容され、頬から歯が飛び出した子のケガの手当てをしたこともあった。そういう中で、女の子たちの「望まない妊娠」を避ける性教育を依頼され、産婦人科から借りた鉗子分娩の器具を見せる等の性教育を行った。女の子たちは脅え震えていた。その様子を男性の先生がニヤニヤ笑って見ていた。今思えば、それはセクハラであるが、当時そういうことばもなかった。性教育をするときの相談場所として性教協に出合い、それがとても心強かった。

学校に思春期の専門家がいない

思春期の子たちは自分らしさにこだわり、「生きるって何だろう」という哲学的な解答を求めながら生きている。そういう素敵な時期の子たちと共に学ぶことがたのしかった。また、子どもたちは、からだのことをとても気にしており、異性からどう見られているのか等、容姿にコンプレックスを持っている子も多かった。教科書には「思春期になると異性に興味関心が芽生え」とあり、そうでない子たちの相談に乗ることもあった。学校に思春期の専門家はおらず、性教協や思春期学会等、学校外に学習の場を求めていった。

「学校で恋愛はないことに」から「ニーズに応じた性教育が必要」へ

学校では、恋愛に関して向き合っておらず、「ませている、色気づいて」等とされていた。本来、相談にのるべきだが、学校で恋愛はないことにされていた。そんな中で子どもたちはSNSでポルノ情報に行きついてしまっていた。その情報の多くは暴力で女性の性がモノ的に扱われている。そんな現状を踏まえ、「ニーズに応じた性教育をする必要がある」と強く感じた。

教育虐待・生き辛さに沿うことばかけを

塾や習い事等に連れ回される子たちも多く、子どもの体力に見合わない教育を「教育虐待」と言っていた。子どもたちには有給休暇はなく過酷な受験勉強等、大変そうであった。「上手に仮病を使って休みな」と言っていた。また、小学校高学年でジュニア脱毛に連れていく母親もいて性毛のない子もいた。性毛がないので、ナイロンが擦れて痛みを訴える子もいた。それから、ファッション雑誌には同じような体形やメイクをした子たちしか出てこず、作られるボディイメージ、体形に合わせて服を選ぶのではなく、服にからだを合わせる子たちもいた。ある調査では、ＳＮＳに顔や制服写真、動画を加工して修正して上げた中高生は４割を超える。思春期はアイデンティティ「自己同一性」の確立に向かっていく大切な時期であるが、それに伴うコンプレックスもジェラシーも学校では扱ってもらえていない。なぜそんなことをするのか、その子の心情の背景、生き辛さに沿ったことばかけを先生は持つ必要がある。

放り出さないための学校教育が大事

「私たちは『買われた』展」で紹介されていた子どもたちの手記に「もっと自分を大事にと言われるけど、声をかけてくれる大人たちは自分たちを見下していて、そういう大人を信頼することはできない」というのがあった。そういう子どもたちは騙され続け、「学習性無力感」という状態に陥り、「もっと自分を大事に」ということばは、大事にされた経験がないと響かないし、届かない。そこに放り出さないための学校教育が大事である。

最後に

金子さんの実践は、思春期という素敵な時期を生きる子どもたちの現状がベースで、子どもたちの事実から出発する実践の大切さを改めて感じました。

（船越 裕輝）

性教協４０周年記念企画全国まるっとセミナー　まるっと講座①　報告

第１講座　いま性教育に必要なことは何か
-社会的養護・特別養子縁組の実態を交えながら-

産婦人科医の河野美代子さんは現在、特別養子縁組斡旋、ワンストップセンター、にんしんSOS広島の顧問などの活動で、妊産婦とその子どもにとって最も良い方法は何かと探っておられる。10代の妊娠相談の実態をあまりにも分かっていない議員の「避妊について教えることは家族を壊すこと」という発言をきっかけに、河野さんは特別養子縁組のお世話を始めた。

養子縁組に似た制度に、里親がある。これは、親権が実親にあり、原則として18歳まで、毎月9万円の里親手当と養育費の補助がある。一方で養子縁組は特別養子縁組と普通養子縁組があり、共通するのは親権が養親にあることと、国からの補助はないことだ。特別養子縁組の歴史は1973年にさかのぼり、民法で導入されたのが1987年。2017年には711組が成立し、厚労省は年間1000件の成立を目指す。しかし、ここで大切なのは数値であろうか。子どもたちひとりひとりの幸せを願うべきではないだろうか。河野さんは私たちに投げかけられた。

河野さんは、斡旋事業を診療の延長と考えており、診察料･実費以外の料金はなし、基本、斡旋は順番で、順番が近づいたら家庭訪問と研修を行う。出生届は実母さんの子として提出があり、実母が退院すると養母が教育入院する。退院後、自宅で縁組成立前養育が始まり、児の住民票は養親宅に同居人として記載される他、児の保険は独立して国民健康保険となる。家裁に申立て、児相に連絡ののち、養育・監護状況の確認があり、家裁の許可が出れば戸籍を届け出、特別養子縁組が成立する。許可がおりる前には実親に意思の確認がある。河野さんが関わるのは、周りが強引にすすめるのではなく、実親が赤ちゃんを手放すことを納得し、特別養子縁組を希望されるケースとこだわっている。迷っている場合はいつまでも待つ。妊娠・出産を経験する母親の思いが尊重されるのは、人工妊娠中絶とも重なるところであろう。実母は、高校生であったり、ソープ嬢であったり、不倫関係、きょうだい間のレイプなど、妊娠背景はさまざまである。その背景を含めて養親は迎え入れる。斡旋者によって禁止しているところもあるが、河野さんは、実親と養親の両者が望めば会う機会も提供する。ただし、後から「返してほしい」と裁判になるケースがあることから、実母が相手の男性と繋がっている場合は養子縁組を行わない。これは言い換えると、全例が妊娠の相手の男が逃げているということになる。さらに､河野産婦人科クリニックに来る妊娠相談は高校生が４割ほどで、彼女らの妊娠の相手の約70%が社会人だという。10代の性交相手の多くは社会人であるという認識を持って、学校現場で性教育を行う必要がある。

「ほとんどの生徒が、時期はバラバラであっても、いつかは避妊が切実になるときがくるから、すべての若者が避妊を学んで大人になってほしい。そのために、高校進学しなかったり中退したりする子どももいるから､義務教育で避妊を教えたい｣との願いで、河野さんは学校での講演活動も行っている。ただ画一的にならず、一生セックスしなくてもいい、同性同士カップルが子どもを望むとき、ハンデはあるけれど工夫すれば可能など、選択肢を生徒たちに伝えている。包括的性教育を軸に、学校、医療などの分野を超えて、性の幸せをともに願って行動していきたい。

（辻　奈由巳）

性教協40周年記念企画全国まるっとセミナー まるっと講座① 報告

第２講座　サークルで「国際セクシュアリティ教育ガイダンス」を学ぶ

本講座は、全国助産師サークルが担当し、サークルの概要説明や学習会体験などが実施された。助産師は、出産を円滑に進行し、新生児や乳児のケアを提供するなど「社会的責任を持った専門職」であり、健康に関する相談や教育も担う。性教育を熱心に行う者も多く、2019年３月８日（産婆の日、国際女性デー)に13名の助産師によりサークルが結成された。現在は、会員70名と増加傾向にある。設立時、海外在住者がいたこともあり、コロナ禍以前からZoomを使って活動していたのが特徴的だ。2020年5月よりZoomでの公開学習会を開催し、その後もオンライン座談会、ガイダンス連続学習会をすべてZoomにて行ってきた。会員は、助産師と助産学生で構成されているが、「看護師も参加したい」との要望があるようで、今後は対象を拡大していくことを検討している。

講座は、①助産師サークルについて知る、②オンライン学習会における効果的な学習方法について考える、③オンライン学習会の体験を通じて交流を深める、といった３つの目的で行われた。まずは、「Zoomの扱いになれよう！」ということで、名前の変更の練習（例えば、障害児・者サークル会員であれば（障)、乳幼児サークル会員ならば(乳)と名前の前につける、グループワークに参加可能な人は、「☆マーク」を付けるなど）や、Zoomでのリアクションの練習（スタンプで手をあげるなど）が行われた。途中クイズも出題され、回答をチャットに記入するなど、Zoom初心者の方々には「初めてチャットを使うことができた」「Zoomのスキルが向上した」と好評であった。

助産師サークルでは、毎月学習会を行い、ガイダンスのキーコンセプトを学んできた。その中で、「ガイダンスをオンラインで学ぶ上での効果的な方法」をサークル内で検討し、効果的であったグループワークを今回の参加者で体験した。筆者が割り当てられたグループは、助産師や養護教諭が中心であった。東京都のある中学校養護教諭は、「バッシングが起こってから性教育をやるのが難しくなった。今は行っていない」と実情を吐露すると、長崎県の助産師から「あきらめないで。私も本当に色々なことを言われた。なんとか継続させて42年間やってきた」と参加者同士で励まし合う場面があった。諸事情でガイダンスの話まで至らなかったが、貴重な交流の場であった。

今回の講座を通して、助産師サークルは、「科学的な根拠をもとに道徳的ではない性教育を行う」ことを重視していることが伝わった。ただし、「道徳的な性教育」の定義に戸惑う参加者もおり、チャットでは、「命は大切だと言うことは、道徳的だということではないと思う」、「道徳とは価値観の強要ではなく、例えば友だちを信頼する、大切にする、約束を守る、といった内容のことだと思う。私たちが行っている性教育は十分、道徳的だと思う」、「前半の講演内容で、『道徳的な性教育』という表現はおそらく、結婚までは性交をしない、性交について触れないなど『禁欲的』という意味を言っているのか？」と質問が相次いだ。それに対し、本講座コーディネーターの水野哲夫さんは、「与えたい徳目が先にあり、集団にある規範を教えてくれというのが道徳的な性教育である」とし、命については倫理観の話であるとの発言があった。その後もチャットでは、「以前、助産師は、『お母さんがどんなに頑張って産んだか』という話をすることが多く、『お母さんに感謝しましょう』的な話が多くて、それが道徳的に偏った、助産師の性教育が問題にされるところ」、「最近は、学校側もいろいろ家族構成や子どもの状況から、道徳的な性教育を望まないところも増えてきている」との声があった。今後も議論が必要だろう。　（門下 祐子）

連載　「親ばなれ - 子ばなれ」その３

「自律（オートノミー）」と「自立（インデペンデンス）」との関係を中心に（１）

今回は、本通信 No. 124 の特集で、ぽぽろスクエアの乙須直子さんが書かれた「『子の自律・親の自律』をともに考える～『PSA』学習会を通して～」を「応答的」に読み深めていきたいと思います。乙須さんの原稿は、『ＰＳＡ』(Parent-Staff-Association) という保護者とスタッフが一緒に「自立、自律」について考え、学んでいく実践が綴られています。タイトルでは「自律」が、文中では、「精神的自立（自律）= 自分のことは自分で考え自分で決める」「『依存的自立 = 他者に依存しつつ自立（自律）する』という文脈で、「自立」と「自律」という言葉が使われています。「自立（自律）」と表記されているので、読んでいるとわたしなどは、うまく意味がつかめず混乱してしまいます。たまたま異なる概念の「インデペンデンス」を「自立」、「オートノミー」を「自律」と、漢字表記は異なりますが、同じ発音の「じりつ」と語呂良く訳してしまった結果でしょうか。もちろんこの二つの言葉は「意味」も異なります。だから「わかったようでわからない」、そんな気持ちにさせられます。今回の「応答」は、この「わからなさ」についてです。「自律（オートノミー）」の意味だけでも、わたしも混乱状態、整理をするのにあと 3 回はかかりそうです。そして、『ＰＳＡ』という保護者とスタッフが一緒に「学び合う」ことの大切さについては、まだまだ先になりそうです。関連して「学び(learn)」と「学びほぐし（unlearn)」についても書いてみたいですね。乙須さんの応答は切りの良いところでおねがいすることになりました。

今回の「自立」「自律」もそうですが、ニッポン語は、「ハシ」（橋、端、橋）のように、「同音異義語」が多いの特徴です。「このハシ渡るべからず」。これは一休さんの頓智でも使われていました。わたしたちは、普段、何気なく使っていますが、ひらかな、漢字、カタカナという文字表記を混合させているのは、ニッポン語だけです。ハングルは漢字使用をやめました。ベトナムは漢字文化圏だったのですが、ベトナム語は特殊なアルファベット表記です。中国では、英語などの外来語もすべて漢字に翻訳します。ニッポン語のように、カタカナで表記することはありません。

柄谷行人（1997）は「日本精神分析」の中で、「漢字は日本語の内部に吸収されながら、同時につねに外部的なものにとどまっている」と書いています。「漢字で書かれたものは抽象的なものと見なさ」れます。これは、奈良時代以降、仏教や儒教などが典型ですが、中国から漢字が入り、こうした性質を帯び続けます。同じことを大澤真幸（2012）『近代日本思想の肖像』のまえがきで、柄谷に学びつつ、「外来語の外来性は、文字の使い分けによって、いつまでも明示されるので、決して消去されることはない」と書いています。明治以降、漢字に翻訳された「教育」「人権」「民主主義」などの西洋語もそうです。加えて、現在では、タイトル、エンパワメント、ジェンダーなど、漢字に翻訳することもなく、カタカナで表記をして、そのまま使っています。最近では、SOGI、SDG s などはそのまま記号として使われていますね。この「外部的なもの」「外来性」という刻印づけは、大澤の比喩を借りれば「客人として迎えられたが、いつまでたっても身内としては認められてこなかった」とい

う性格を帯びがちです。タテマエとしては受けとめるけれど、本気で実現、実行するつもりはない。ダブルスタンダードの大きな要因ですね。いわば「お客さん」言葉です。わたしの言い方では、しっくりとした大和ことばで表現できない限り、ほんとうの意味で自分の血や肉となった思想にはなりにくいということでしょうか。意味するところを実践しながら、ぴったりとくる大和ことばを創りあげることが求められるわけです。

こうしたことも「人権」「民主主義」がなかなか根づかないニッポンという「國體（国体）」の「体質」の一つの要因だと考えます。大好きな作家山代巴は、夫であった活動家山代吉宗の「日常茶飯にまで、人権の折り目をたたむ」という言葉を残していますが、なかなかこの境地には至りません。ちなみに、巴は、敗戦後、広島で農民運動や農村の文化活動に関わっていきますが、この頃、巴に大きな影響を与えたのが哲学者の中井正一です。「委員会の論理」という論文は名著です。この中井は、日本人の 3 つの病根「あきらめ根性・みてくれ根性・ぬけがけ根性」を克服しなければ日本に平和や民主主義や人権の土台は築けないと語っています。この言葉に、巴は大いに共感し、ヒロシマの被爆の聴き取りとともに、生活綴り方を基本とした農村の女性たちの意識改革が彼女の生涯の仕事になります。この言葉から 70 年以上経過しても、「世間」のまなざしは残ったままですね。

でも、この漢字にも、良いところもあります。たとえば、この連載のタイトルでありテーマでもある「親ばなれ－子ばなれ」の「はなれ」です。松本さんは、あえて「はなれ」をひらがなで書いています。わたしもそうしています。それは、「はなれ」という音を聞き、ひらがなで「はなれ」という表記を見たときに、少なくとも「離れ」と「放れ」という二つの漢字を思い浮かべるからです。「離れ」の方は、物理的にくっついていたものが分かれるの遠ざかるの意味。「放れ」の方は、束縛を解かれて自由になるの意味。みなさんは、どちらの意味で使っていましたか。ちなみにわたしは、両方の意味を重ね合わせて理解しようとしていました。だから、「ひらがな」なのです。「親ばなれ－子ばなれ」って何だろう？　どのようなことだろうか？　これって大切なこと？　何で大切？

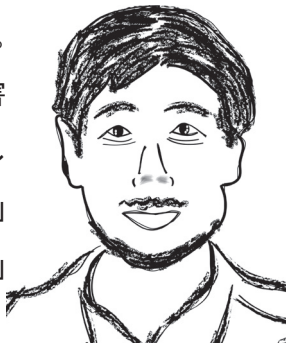
大切だったらどうすればいいの？　性と生との関係は？　「自立」や「自律」とも？　こんなことを考えようとする時に、「離れ」と書いてしまうと大切な「放れ」の意味を取り逃がしてしまいます。ちなみに松本さんは、わたしとは異なった理解で、ひらがなにしていました。これはこれで、松本さんのところで「応答的」に書いてみます。

先の柄谷は、「三種の文字を使って語の出自を区別している集団は、日本のほかには存在しない」と書いています。いまは、アルファベットも含め四種の文字ですね。これが千年以上続いているわけです。こうした特徴を無視して、「日本のあらゆる諸制度・思考を理解することはできないはず」とも。その理由は、わたしたちはこうした書き言葉を使って、さまざまな社会システムを考え、作っているからですね。丸山眞男は、こうした何でも中途半端に受けとめる言葉の「雑居性」が戦争責任を典型にさまざまな政治の「無責任さ」を生みだしている一つの要因と鋭い指摘をしています。

ここまで書いていたら、与えられた字数になりました。次回は、寄り道せずに、「障害者権利条約」を手がかりにしながら、「自律（オートノミー）」と「自立（インデペンデンス）」との関係に戻りましょう。

（木全　和巳）

木全さん似顔絵



「教育のつどい」ジェンダーの分科会でレポート報告を聞き、みなさんにお伝えしたいと思い依頼した原稿です。

さまざまな家族を知ることは、人の多様な生き方を学ぶ契機になる

私は現在、教員を退職して再任用で引き続き小学校で子どもたちとかかわっている。2020年度は、隣の小学校に替わることになった。愛知県尾張地方の小さな市の小さな小学校。その学校で私は家庭科を教えることになった。

児童140名足らず。全学年１学級。だが、どの学級も半数以上が外国籍の児童である。ブラジル、フィリピン、インドネシア、パキスタンなどさまざまな国をルーツにもつ。母子、父子家庭の子もかなりいる。６年は、33名。コロナ禍で６月から授業が再開されたが、授業では発言する子は決まった数人、板書もしっかり書けない。日本語の理解不足なのか意欲の問題なのかよくわからない。３か月も会っていない友達にどう自分を出していいのか戸惑っているという雰囲気であった。その中で特に気になる子が２人いた。１人はジュンくん。毎日遅刻だが学校には来る。教科書を出さずいつも机に伏せている。４年の時にフィリピン人の母と死別し父と暮らしている。もう１人はカズくん。ひょうきんで楽しい子だが「俺の父さんは勝手に（家を）出ていった」と平気そうに？口にしてしまう。他にもいろいろな家庭に暮らしている子どもたち。家庭科では家での生活について話題にするが、彼らはどんな思いで授業を受けているのか、心無い言葉に傷ついていないかと気にかけながらの授業であった。

いろいろな家族の中で暮らしている子どもたちと「家族」について考えてみることで、自分の家族が多様な家族のひとつであると分かり、いろいろな家族があっていいと肯定的に捉えられないかと授業をしてみた。１時間完了の授業である。

学習プリントの４つの質問に（家族・家族ではない・わからない）のどれかに〇をつけてもらった。正解があるのではなく、今自分はどう思っているかで選ぶようにした。ペットは家族か、一緒に住んでいなくても家族か、名字が違っても家族か、血が繋がってなくても家族かについて、そして「家族はいつも仲よしか」についても話し合った。最後に絵本『いろいろいろんなかぞくのほん』の読み聞かせをした。私の亡くなった父と母のことをもういないけど大事な家族だと話した。事実婚の母と高校生が、名字が違うという新聞記事を紹介し、「名字が違うと子どもがかわいそう」という意見があると話すと、ブラジル国籍のルイスくん（彼は別姓）が、「違ったっていいじゃん」とボソッとつぶやいた。血の繋がらない家族ではステップファミリーの話、また、野田市の虐待事件の話もした。授業のまとめではこんな感想があった。「家族の形は、自由」「無限大」「人それぞれ」「お互い愛している人はみんな家族」「いろいろな意見があることに気がついた」「他の人と違っても別によいと思う」「血がつながっていなくても仲よしなら家族」「女性どうし男性どうしでも子どもが欲しいと思う気持ちがあるのだと初めて知った」「初めての話は、へええと思った」など。授業ではあまり発言がなかったが、子どもたちの事実を受け止める感性は柔軟だと感じた。カズくんは「出て行った父親以外が家族」と書いていた。ジュンくんは気づくと顔を上げて（ふんぞり返って）話を聞いてくれていた。それだけで私はこの授業をしてよかったと思った。

５年でも、同じ授業をしてみた。６年と違って19名の仲よしの明るい学級。「私、お父さんと（名字が）違うよ」と何人もあっけらかんと話してくれた。「別姓で困っていることある？」と聞くと「何にも困ってない」「仲よし家族だよ」と。また、パパ２人ママ２人の家族では、「ブラジルでは（同性婚）そういうのあるよ。私、知ってるよ」と話してくれた。へーとあっけにとられているのは、日本国籍の子たち。外国籍の子がいてこそのおもしろい授業であった。

（柳　富代）